

日本の音楽家を
知るシリーズ

古代と現代を極めた天才

黛敏郎

監修 黛りんたろう
著者 新・3人の会

「どんなに素晴らしい音楽も
余韻^{よゐん}嫋々たる梵鐘^{ぼんしやう}の音の前には、
全く色褪せた無価値なもの
としか響かない」

黛敏郎という生き方と音楽

日本文化のありようを
芸術へと昇華させた作曲家

yamaha music media

《涅槃交響曲》

日本のクラシック音楽の金字塔

スペクトル楽派

「ここ数年来、私は鐘に憑かれてしまったようだ。どんな素晴らしい音楽も余韻^{おひびき}嫋嫋^{たうたう}たる梵鐘^{ぼんしょう}の音の前には、全く色褪^{おそ}せた無価値なものとしか響かないとは一体どうしたことだろう」

これは《涅槃交響曲》初演に敏郎が寄せた文章である。

20代を通じてジャズやミュージックコンクレート、電子音楽など新しい音響の探究者であった敏郎。20代の最後にたどり着いた興味の対象が、鐘であったというのは興味深いことである。

鐘の音の音響学的研究に着手し

た敏郎は、NHKの厚意を得て鐘の音の音響分析を行う。上野寛永寺、平泉中尊寺、奈良東大寺、京都黒谷信如堂など。そして分析で得られた結果に基づいて、電子音ではなく生の音で、人間の手や息によるオーケストラで鐘の音を再現したいと考えた。

NHK交響楽団の協力のもと、オーケストラレシーションの実験を繰り返し行い、《カンパノロジー》という作品を試作、初演した。

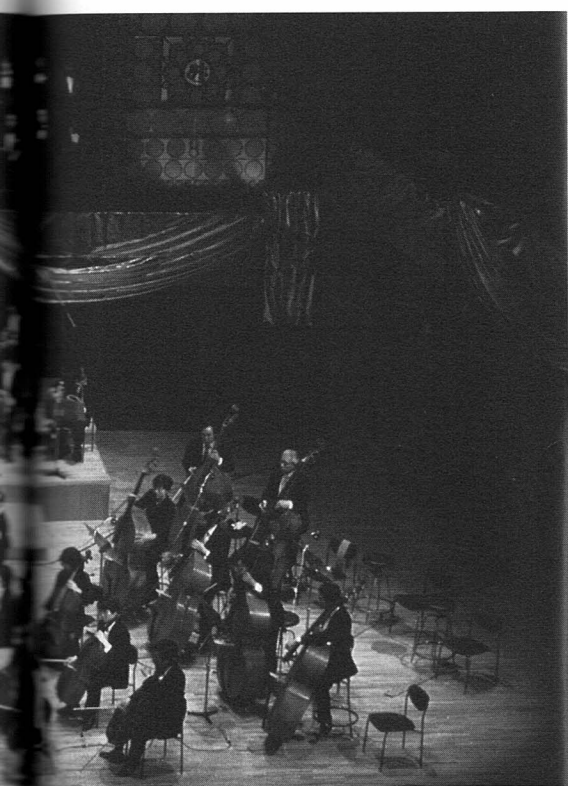
同一の音がさまざまに楽器を変えて奏されたり、弦楽器の群が細かくグループに分かれてそれぞれ

異なる運動をしたり、さらにはオ

ーケストラ全体を分割してホール
の各隅に配置し、相互間に音を動かしたりすることで、鐘がうなる
ような音をオーケストラで作った

のである。

このような作曲法は四半世紀の後、敏郎も若き日に学んだバリで、ジェラルド・グリゼーやトリスタン・ミユライユらにより取り入れ



られた。彼らは「スペクトル楽派」と称された。

初演は大反響

《カンパノロジー》を試作後、敏郎は考えた。なぜ自分が鐘の音に惹かれたのか。音響学、あるいは生理学的意味とは違った側面以外からそれを解明したいと。

そして「鐘の音の魅力に惹かれている自分の中に、多分に宗教的な感動」を見出す。「そのとき、自分の中の近代ヨーロッパがガラと音を立てて崩れて行く」のを感じ、敏郎の眼前に「仏教」が大きくクローズアップされてきた。

仏教を研究した敏郎は「楞嚴咒」と呼ばれるお経と出会う。

《カンパノロジー》によって得られた合音を基にしたパッサカリアや、合音を音列化した技法を用いた奇数楽章、お経、そして声明による経文歌（ときには12の声部がすべて異なった音を歌うクラスタ技法をも用いる）を偶数楽章にそれぞれ配した全6楽章、そして

男声合唱と三群に分割されたオーケストラのために作曲されたのが《涅槃交響曲》である。

《涅槃交響曲》は昭和33年（1958）4月2日、岩城宏之の指揮、NHK交響楽団他の演奏により、〈3人の会〉第三回演奏会で初演された。

初演は大反響を呼んだ。初演後間もなく当時のN響の常任指揮者、ウィルヘルム・シュヒター指揮による録音がレコード化され、国内外で発売された。

また海外においてはベルリン芸術週間でカラヤン指揮ベルリンフィルハーモニー管弦楽団での演奏という企画も持ち上がる。実際に昭和40年（1965）に演奏されたとき指揮台上がったのは渡邊暁雄だった。

黛敏郎20代最後の大作交響曲は、紛れもなく日本のクラシック音楽作品の金字塔である。



《涅槃交響曲》を指揮する敏郎。

武満徹と敏郎

終生武満の創作を助けるピアノ

《遮られない休息》

「病身だけ大変に才能のある若い作曲家が君に会いたがつているんだ」と、芥川也寸志が敏郎に話しかけたのは昭和28年(1953)のこと。

敏郎の招きを受け、若き作曲家は友人と連れ立って代々木の敏郎宅を訪れる。

若き作曲家は敏郎に「武満です」と挨拶をしたきり黙ってしまふ。同行した友人の作曲家、鈴木博義（すずき ひろよし）と武満は、芸術家グループ「実験工房」の同人だった。

「実験工房」は音楽のみならず美

術や映像のメンバーも含んだ、複合的な若き芸術家の集団であった。訪ねてきていきなり黙ってしま

ったふたりに、敏郎はいろいろと話しかけるが答えはすべて「ハイ」か「イイエ」であった。

そのころ武満が作曲した《遮られない休息》の譜面を見た敏郎は、既存の音楽とは違う武満の美学の特質に興味を持った。

当時武満は結婚をしたばかりで、病身故にあまり仕事もなく、自分のピアノを持っていなかった。

「街を歩いていてピアノの音が聞こえたらその家（見ず知らずの家である）に頼んで弾かせてもらっ

ていた」という話を聞いた敏郎は、家にあった2台のピアノのうちの1台を武満に譲ることにする。

名前がタケミツ

敏郎の妻、桂木洋子は敏郎との婚約時代、敏郎がパリ留学から帰国した時に驚かせようと、近所でピアノを講じていた「江川」と表札のある家を訪ねる。そしてその家にあつたガルブランセンというアメリカ製アップライトピアノを購入。それを嫁入り道具として持参していた。

武満の家に予告もなく贈られたそのピアノは、終生武満の創作を

助ける大事なピアノとなった。

「後々、武満さんはピアノの代金に当てるお金を持つてこられた。決して美談などではなく、ピアノを持ってない悩みを共有した若き友人へのプレゼントだった」と敏郎は語っている。

ちなみに洋子にピアノを講じた江川家の娘・眞澄は、後に作曲家・エレクトーン奏者として活躍するようになる。そして彼女の生涯の伴侶が、敏郎に武満を紹介した芥川也寸志とは、いささか運命めいた話でもある。

その後、敏郎は映画音楽のアシスタントに武満を幾度となく指名。



芥川作曲賞の会場にて。右から武満徹、江村哲二、敏郎。

「僕なんか頼まなくても黛さんは書けるのに、そうやって僕の生活を支えてくれた」

後年、社会的活動が増えて作曲から遠ざかったように見えた敏郎に、武満が長文の「ラブレター」を書いたこともあった。岩城宏之を交えて3人で座談会でのこと。「もうちょつと音楽に真剣になってください」と言った武満に、敏郎はこう返す。

「そんなこと言ったって君の名前がタケミツじゃないか」

平成8年（1996）、武満が66歳で逝去する。友人のひとりとして弔辞を読んだ敏郎は、その後、あるメロディーを繰り返し口ずさんだ。そのメロディーは、敏郎のアシスタント時代に武満が書いたものを「あまりの哀しさゆえ」敏郎が使わずに取っておいたものだった。

「ふたりしか知らない若き日の思い出」のメロディーは、谷川俊太郎により歌詞がつけられ《MI・YO・TA》として蘇った。

「題名のない音楽会」

今も放送が続く敏郎の遺志

ライフワーク

敏郎といえば「題名のない音楽会」。その司会者としても知られている。

独特のポーズ、マイクの持ち方、そしてダンディーな語り口を覚えている読者も多いと思う。

30年を超える長い時間を番組に捧げ、死の2週間前でも収録に臨んだ。洋子夫人の言葉を借りるならば「黛にとってのライフワーク」でもあった。

ラジオ、テレビ、映画、新聞、雑誌、ありとあらゆるメディアに顔を出していた敏郎にとって、昭和

39年（1964）から始まったテレビ番組「題名のない音楽会」こそ、そのメディア活動の集大成といえよう。

作曲家としての多角的な視点で番組が作られており、あらゆる音楽の可能性を実験していた。異種音楽とクラシック音楽の融合、編曲の実験、音楽の科学的検証など、敏郎の創作にも通じる世界をそのまま番組作りにも適用して、常に新しい可能性を探っていた。

もちろん新しさ一辺倒ではなく、古典クラシックも、娯楽音楽も丁寧扱っていた。

当初はオリピンピックを記念して

の番組であり、キャッチコピーは「ベートーヴェンから浪花節まで」。

昭和45年（1970）の「ベートーヴェン生誕200年記念番組」では、ベートーヴェンの楽曲に乗せて俳優・小沢昭一が浪曲でベーターヴェンの生涯を語る、というキャッチコピーを地で行く企画が放送された。

総合芸術作品

敏郎の発言も番組の醍醐味だった。

「日本のオーケストラが日本人の作品を演奏しなくてどうする」和製ポピュラー・ポップスについて



「題名のない音楽会テーマ音楽」表紙。

は「英語の使い方がおかしい」「日本語のアクセントを無視している」など鋭い批評もあった。

日本を代表する作曲家が亡くなったとき、まっさきに追悼番組を組むのもこの番組だった。そこには視聴率だけでない番組の価値を認めたスポンサー出光興産のバックアップも特筆されよう。

番組で作曲コンクールを行い、

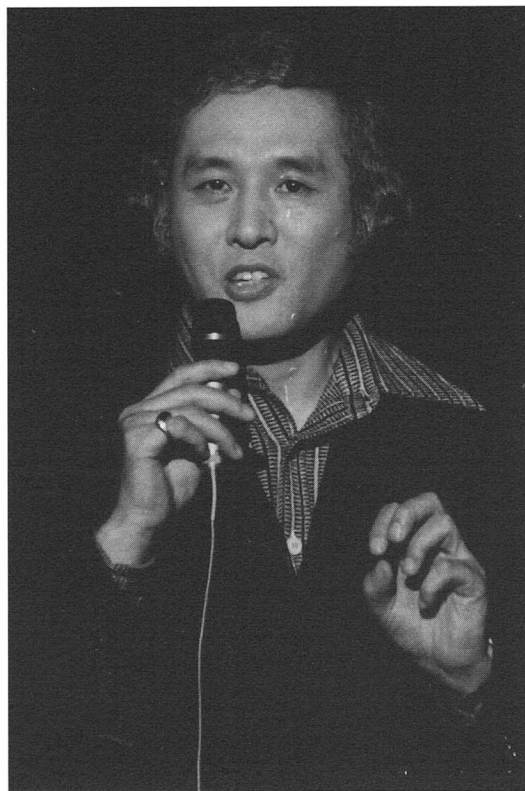


「題名のない音楽会」のスタッフと会議をする。

〈3人の会〉で審査をして若手作曲家を発掘したこともあった。

その他ゲストは多岐に渡り、伊福部昭、團伊玖磨、芥川也寸志、武満徹、坂本龍一、メシアン、ケージといった作曲家はもちろん、岡本太郎、遠藤周作、寺山修司、イヴェット・ジロー、美空ひばり、北島三郎、タモリ、そしてデーモン小暮閣下にいたるまで枚挙にいとまがないほどである。

放送中止で注目を浴びた回もあった。昭和56年(1981)の「憲



音楽家ならではの司会と、明快な語り口が評判となった。

法記念日を考える」では、ゲストの作家と論争になり放送見送り。

論議に公平性を持たせるため、左翼・右翼両方をと考えたためのことであつた。とはいえテーマが重い回があれば、ほかの回で軽いテーマを扱い、バランスを考えていたようだ。

「題名のない音楽会」は、敏郎にとって作曲と同じように、自己のエネルギーを傾けて作られた総合芸術作品と言えるのではないだろうか。

三島由紀夫と敏郎 音楽との共演を前提に

三島と音楽論

映画監督の木下恵介にバリで紹介され、生涯を通して盟友とも言うべき関係を続けた三島由紀夫。

「ア・ベ・セ」もできなかった三島を連れて、オペラ、映画など、フランスを堪能することからふたりの交友は始まった。

その交友は帰国後はより深まって「正当な論敵の中にしか本当の友を見出すことができない」という三島と音楽論争なども経た。

三島原作の映画音楽や、演劇の音楽など、敏郎が担当することも多かった。

ラジオドラマの価値を認めない

と断ずる三島が、音だけでナレーションもなしに、本来はセリフもなしに成立するような、音で心理をえぐるドラマとして書いた『ボクシング』、シュールレアリスティックで表現主義的な詩の朗読と電子音楽による『理髪師の学術的欲望とフットボールの食欲の相関関係』、オーケストラと合唱とオンド・マルトノによる『祝婚歌』などは、音楽との共演を前提に詩が書かれたものもある。

三島事件

昭和38年（1963）、日生劇

場の浅利慶太と石原慎太郎を通じて、敏郎と三島が初のオペラを書くことになった。タイトルは『美濃子／MINOKO』。

小澤征爾指揮での初演と決まり、オペラ作曲のために三島は、敏郎と演出の浅利慶太との会議を経て、台本を執筆。その後、3人で徹夜の討論をして、どの台詞をコーラスにするか、またどのくらいのテンポにするか、アリアにするか、二重唱にするか、台本の書き直しも含めて具体的に話した。

作曲の期限は昭和39年（1964）1月末。しかし、その仕上がりが予定よりも遅れたために、演

出家から延期を申請される形になってしまった。

敏郎は間に合わせるように作曲を進めていたものの結果的に延期が決まり、その約束違反を厳しく追求する三島と疎遠になってしまった。

敏郎との約束の時間には一度たりとも遅れなかった三島は、自分に厳しいのと同じく、人にもそれを要求する性格だった。

『美濃子／MINOKO』は第1幕のヴォーカルスコアで未完となっている。

敏郎と三島が最後に会ったのは、昭和45年（1970）の5月ごろ



「祝婚歌」の表紙。



『金閣寺』をオペラにする約束を得るため。最後の面会は3時間ほどであった。

敏郎は、三島事件についてつぎ

のように述べている。

「『政治の腐敗、人間の疎外、物質的繁栄に酔いしれた魂の不在、それに対する憤激』それを爆発さ

せて起こしたもので、軍事的クーデターではなく、世の中にショックを与えるために、一身を犠牲にした崇高な行為であった。目指し

たのは精神的なクーデターであった」と。

盟友・三島由紀夫とともに。

敏郎の交友録

敏郎は社会に対してかなり右派な政治的な発言や行動をしたが、主義主張を異にする人たちをも大切にした。

《3人の会》の同人でもある芥川也寸志は、政治的には敏郎と異なる立場にいたが、何かあればすぐ敏郎に電話して相談するほど強い信頼関係を築いていた。

左翼勢力と見られていた雑誌『話の特集』の株を生涯保持していたし、編集長の矢崎泰久を「題名のない音楽会」のゲストに招くことさえした。

敏郎とは違う立場で、社会に向き合っていた作曲家のひとりに林光がいる。

岩城宏之が企画した音楽会で、林と敏郎が連弾することになった。低音部を敏郎が、高音部を林が弾くことになった。コンサートが始まりピアノの前に座った敏郎は、観客に聞こえるように言ったのである。

「どうして林さんが右なの？」と。



芥川也寸志とともに。

敏郎とレコード

敏郎はレコードと非常に縁の深い作曲家であり、デビュー作の《デイヴェルテイメント（10楽器のための喜遊曲）》は初演から2年ほどでSPレコードとして録音された。21歳の新人作曲家としては異例のレコード化であったが、銀座の楽器店でこの曲が流れているのを多くの音楽ファンが聴いて憧れをもったそうである。

非売品や希少盤も多く、小部数しかプレスされなかった電子音楽のレコードや、校歌、社歌などもある。なにより残念なのは、バーンスタインが指揮してニューヨーク・フィルが演奏した《饗宴》の録音。これは、アメリカで発売直前まで行ったが契約上の問題で流れてそのまま、今も世に出ていない。

作品を収録したわけではなく「題名のない音楽会」の独特の語りや作曲家としての視点を売りに作られたレコードもある。なかでも小沢昭一の名調子による「ベートーヴェン人生劇場」は必聴である。そしていわゆる教育レコードもある。日本の伝統音楽をさまざまな方向から研究解説したレコード5枚組の「古典への旅」

をはじめ、「東大寺のお水取り」「アイヌ音楽」などさまざまなアプローチのレコードは非常に勉強になり、敏郎の音楽の原点を知ることができる。

こんな変わり種もある。敏郎ならではの視点で作った幼児用の音楽教育レコード10枚組。その名も「リズムくんメロディーちゃん こども音楽教室」。音楽の始まり、なにもない音、ノイズ、民族音楽やクラシック音楽もある。ジョン・ケージの4分33秒、サイコロの目で音を決めてしまう確率性の音楽、ミュージック・コンクレートや電子音楽まで教えてしまう。この10枚で古今東西すべての音楽を知ることができるのである。



黛敏郎こども音楽教室のレコードより。

多忙を極める 昭和40年(1965)の敏郎

映画『東京オリンピック』の上映が3月、突如依頼のきた映画『天地創造』のために複数回ローマ往復など、敏郎にとつての昭和40年は多忙を極めていた。

前年に始まった「題名のない音楽会」は、石丸寛いしまるひろしに預けて半年のお休みをいただき、4月、そして5月中旬から8月とローマへ。9月に日本での『涅槃交響曲』の上演を聴くために10日だけ帰国。10月7日から11月末までをローマを中心に過ごしたのであるが、そのローマ滞在中の5月にはアメリカン・ウインドシンフォニーからの依頼による『打楽器協奏曲』を仕上げている。

5月31日は外山雄三指揮NHK交響楽団が『曼荼羅交響曲』をレコード用録音。夏休みには父親として、息子のりんたろうを連れてローマの撮影スタジオ見学。

9月は、パリ・オペラ座で自作『BUG A KU』を指揮、30日ベルリン・フィルで渡邊暁雄わたなけあけおが『涅槃交響曲』をヨーロッパ初演している(同年春はハンブルクで岩城宏之指揮による部分演奏もあった)。

一時帰国中には40分におよぶテープ音楽『3つの讃』をNHK電子音楽スタジオ

オで作り、アメリカのローバート・ジェフリーバレエ団からオリンピックを題材にしたバレエ音楽を依頼され、吹奏楽編成による『バレエ・オリンピックス』を作曲。

また、ハワイの寺院のために英語による仏教聖歌も書いた。

敏郎の作品としてはチェロ独奏曲『BUNRAKU』について世界で演奏されている作品『シロフォン小協奏曲』もこの年の作品である。



和室で佇む敏郎。

「題名のない音楽会」

30年以上に渡った敏郎時代の「題名のない音楽会」では、硬軟取り混ぜた名企画がたくさんあった。

敏郎の師、橋本國彦や伊福部昭、同級生の矢代秋雄の特集などは、盟友・芥川也寸志が日本のクラシックを積極的に指揮していた姿勢とリンクする。

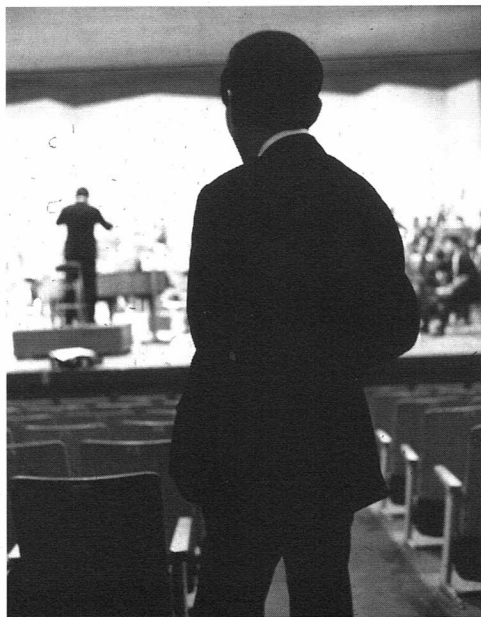
音楽をただ聴くだけではなく、多角的に捉えたユニークな企画が敏郎時代の番組の特徴であった。

指揮者なしで《春の祭典》を演奏してみたり、普段聞こえないようなパートだけ抜き出して演奏する。あるいは4人の指揮者が同時にオーケストラの各セクションを自らの解釈で指揮する「音楽オリンピック」、「政治家や文学者が喉を披露する「歌合戦」シリーズ、そして客席も参加してのクイズ形式の番組など。

しかし敏郎が最も生き生きとした顔を

見せたのは、幾度となく編まれたジャズの特集だった。

自らピアノの前に座り、実に楽しそうにセッションを繰り返しているとき、才気煥発していたであろう10代終わりのブルームington時代に敏郎はタイムスリップしていたのかもしれない。



公開録音の会場にて。

敏郎を聴く

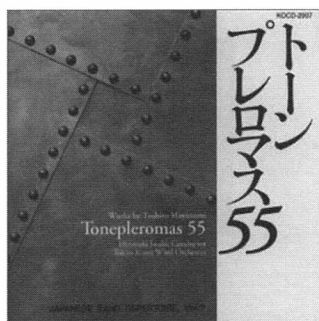


黛敏郎／シンフォニックムード

湯浅卓雄指揮、
ニュージーランド交響楽団

ナクソス

颯爽たる天才の音楽を先入観なしに満喫できる好企画。没後発見の処女作《ルンバ・ラプソディ》、世界最古の宮廷ダンス音楽をオーケストラに脱構築した《BUGAKU》はジャズ的なグルーヴも、曼荼羅の音響イメージ化である《曼荼羅交響曲》などを収録。海外オケでもマユズミサウンドはまぶしい！

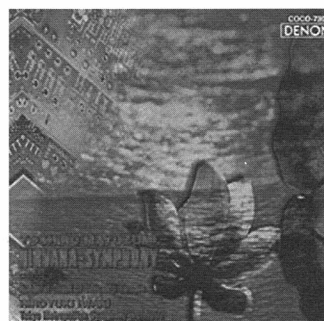


トーンプレロマス55／ 黛敏郎管楽作品集

岩城宏之指揮、
東京佼成ウインドオーケストラ

佼成出版社

ダイナミック&パワフルな音楽を探索した敏郎にとって吹奏楽は打って付けの編成。アメリカン・ウインドシンフォニーに依頼された《打楽器協奏曲》などの連作、音楽用ノコギリを使い、マンボを引用した《トーンプレロマス55》など吹奏楽の枠を超えた管楽傑作集。



黛敏郎／涅槃交響曲

岩城宏之指揮、東京都交響楽団、
東京混声合唱団

DENON

寺院の鐘の響きを音響解析して導き出した独特なサウンド。その妙なる響きと東洋のリズムは昭和33年（1958）の初演から60年を経た今も輝き続けている。三群に分けて配置されるオーケストラと男声合唱。年末の第九とともに演奏されるべき。



黛敏郎／歌劇『金閣寺』

岩城宏之指揮、
東京フィルハーモニー交響楽団

フォンテック

盟友・三島由紀夫原作によるオペラ。梵鐘の響き、経文合唱などマユズミサウンドが最大限に発揮される。世界初演は昭和51年（1976）ドイツだが、このCD発売まで幻の傑作だった。没後は追悼公演で岩城宏之が全国で指揮した。近年、日本が世界に誇るオペラとしてフランス上演も行われた。



オーケストラトリプティーク による黛敏郎個展

水戸博之指揮、
オーケストラトリプティーク

スリーシェルス

《涅槃交響曲》に辿り着くまでの敏郎。若き日の創作を追体験するライブ。ドラムスとピアノによるかっ飛んだピアノ曲。朗唱形式の歌曲。干からびた藝大に瑞々しい天才登場と話題になった喜遊曲。アジア民族音楽を脱構築したスフェノグラムなど、リミックスDJの如きバランス感覚！



黛敏郎の世界

フランキー堺、美輪明宏、高島忠夫、
雪村いづみほか

ポリスター

敏郎は映画音楽の巨匠でもあった。石原裕次郎に寄せたゴージャスなビッグバンドサウンド。加賀まりこのスカットも気だるくオシャレな小編成ジャズピアノ。市川雷蔵にはプリペアドピアノと声明で対応。谷川俊太郎作詞のミュージカル映画など、ほとぼしるごとき天才の手腕。